

C-26 沖縄近世の王、士分の礼服について  
琉球大教育 仲井真治子

目的 日本服飾文化の支流であると考えられる沖縄服飾文化が自然的環境、歴史及び文化の差異によって日本服飾文化とどのような特性をもちてきたかを説明するために今回は近世沖縄の王、士分（貴族のこと）の礼服を調査研究した。

方法 琉球大学付属図書館郷土史料室所蔵の史料、琉球博物館所蔵品及び当館所蔵鎌倉茅太郎氏「写真でみる失われた遺宝、50年前の沖縄展」からの資料等を中心とし、その他琉球古典舞踊衣裳及び左俗にみられる年中行事を参照し、検討した。

結果 王、士分の礼服は17世紀末、18世紀初を境にして性質を異にしている。故に16世紀から17世紀までを近世前半、18世紀から19世紀までを近世後半とする。礼服は冊封使の大札及び儀式に着用した。男子の礼服構成は礼冠、簪、礼衣、襯衣、帯とされ、王に次ぐ士分を9階級に分け礼服用のしかたが異った。近世前半には王から按司まで明帝から賜られた皮弁冠、皮弁服を着用、親方以下子まで朝衣、織冠を用いた。近世後半には国王のみ皮弁冠服を着用、王子以下子まで朝衣を着用した。女子礼服の着用は父親、夫の階級に準じた。女子の礼服構成は簡単で簪、礼衣、襯衣であるが材質と色調は男子以上にきびしく階級が区別された。近世前半には王妃以下按司夫人まで明帝から賜られた打掛ふうの礼衣に胴衣・袴という襯衣を着てあしやけこむねと呼んだ。親方以下子の夫人はたなし、綿衣を着用した。近世後半には王妃、士分の夫人全てたなし、綿衣を着用した。朝衣の色、織冠の織方、簪の材質と模様、等は階級により異った。このように、封建社会に特有の階級による服飾別が明らかである。